

令和5年度流山市平和大使

「平和大使として学んだこと」



この作文集を手にとっていただいたあなたへ

私たちは、「令和5年度流山市平和大使」に選ばれた小学5・6年生二十九人です。

私たち平和大使は、8月5日、6日に平和の尊さを学ぶために広島へ行き、そして、学び、感じたことを作文集にまとめました。

被ばく体験伝承者から貴重なお話を伺い、平和記念資料館を見学した中から、私たちの想像を超える、原子爆弾の恐ろしさや悲惨さ、そして、現在でも多くの人々がつらく悲しい思いをしていることを知りました。

平和記念公園では、「原爆の子の像」のもと、流山市民の皆さんの平和への思いが込められた千羽鶴を献納し、8月6日の平和記念式典には、岸田首相はじめ、国内外の代表者とともに私たちも参列し、原爆が投下された8時15分に黙とうを行い、犠牲になられた方々のご冥福を祈りました。

私たち平和大使の任務は、終わっていません。それは、私たちが広島で学んだこと、感じたことを家族や友人に伝え、より多くの人に知ってもらい、平和のバトンをつなげていくことです。

この作文集を読んでいただいた方も、私たちと一緒に平和への想いを次世代につないでいきましょう。

令和5年度 流山市平和大使

◆目次◆

・作文「平和大使として学んだこと」 1～33 ページ

「原爆の怖さと戦争を起こさないために」	安宅 駿（小山小学校6年）	1 ページ
「平和のために私ができること」	伊藤 芽生（東深井小学校5年）	2 ページ
「今を生きる僕が未来へ伝えていきたいこと」	伊藤 怜音（小山小学校5年）	3 ページ
「伝えていくこと」	稲垣 紘（鱒ヶ崎小学校6年）	4 ページ
「平和大使として広島へ行き思ったこと」	奥野 夏穂（長崎小学校6年）	5 ページ
「広島へ行き、学んだこと」	片倉 俊輔（流山小学校6年）	6 ページ
「平和を守るためには」	柏原 聡太（西初石小学校5年）	8 ページ
「平和」	勝田 結子（鱒ヶ崎小学校5年）	9 ページ
「悲しみのうへの平和」	久保 安恵花（西深井小学校6年）	10 ページ
「平和大使として私にできること」	小林 珠季（西初石小学校5年）	12 ページ
「大事な一瞬が平和のために」	小林 可奈（鱒ヶ崎小学校6年）	14 ページ
「広島へ行き思ったこと」	篠井 瞭太郎（鱒ヶ崎小学校5年）	15 ページ
「平和の大切さ」	里村 藍（小山小学校6年）	16 ページ
「78年前に、広島に原爆が落ちたこと」	鈴木 亨堯（江戸川台小学校6年）	17 ページ
「戦争のこわさ」	鈴木 悠慎（小山小学校5年）	18 ページ
「広島から平和について学ぶ」	辻 勇輝（流山小学校6年）	19 ページ
「被ばく者の思い」	久松 宗功（おおぐろの森小学校6年）	20 ページ
「平和のバトン」	福田 万桜（東小学校5年）	21 ページ
「平和のためにぼくたちができること」	船田 和玖（小山小学校5年）	22 ページ
「原爆のおそろしさ」	松田 和梓（西初石小学校6年）	23 ページ
「平和大使として」	松村 俊太（西深井小学校6年）	24 ページ
「原子爆弾のおそろしさを知って」	丸山 あい（南流山小学校6年）	25 ページ
「たくさんの命を失った原子爆弾」	峰松 沙英（小山小学校5年）	26 ページ
「78年前広島のある日」	村辻 楓（おおたかの森小学校6年）	28 ページ
「当たり前が宝物」	森田 紗弥香（おおたかの森小学校6年）	29 ページ

「もどれたら」	役田 伍泉（長崎小学校6年）	30 ページ
「奪われた日常」	山北 悠護（小山小学校6年）	31 ページ
「命をつなぐ大切さ」	横尾 桃次郎（八木北小学校5年）	32 ページ
「平和大使になって」	吉原 禅（東深井小学校5年）	33 ページ
・写真集		34～38 ページ
・流山市の平和に関する取り組み		39 ページ



「平和大使として学んだこと」

原爆の怖さと戦争を起さなしたために



小山 小学校 6年 氏名安実 駿

「平和大使」を終えた今、ぼくが強く思うことは、核兵器の製造、貯蔵、使用を世界で禁止しなければならぬということである。戦争についてこの話は本で読んで知ったけれど、広島で被爆体験者の話を聞いて、改めて原爆は怖いものだと思った。

お話ししてくださった方は、中学生で爆心地から少しはなれた場所へ電車に乗ったとき、被爆したそうだった。ピカッと光ったあとに、ドンという音とともに電車がゆれたのび

夢中で逃げた。

その後、爆心地近くで自分のおじいちゃんが行方不明になり、二日間あたりをさがし続けしたが、結局見つからず、生きているかもわからないままになった。おじいちゃんもぼくも、た

ら原爆で何もなくなっただけで、怖くささがないと思うけれど、二日もさがしたというのは、すごく勇気があることだと思った。また、さがしているときに見た被爆した人々は、火傷で皮ふが垂れ下がり、肌は真っ赤になり、

倒れても立ち上がり生きるために病院を目指した。でもたどり着くことができず、翌日には肌が黒くなり、顔もわからなくなるくらい体がふくれ上がった。亡くなった。聞いたそうだった。国同士の争いが戦争に発展してしまおうと、自分がかかわりたくなくても学校に行けなくなり、友達と会えなくなってしまう。もし、自分の街に原爆が落とされたらと考えると、とても怖い。

今回、「平和大使」として、平和祈念式典に参加することができ、平和について考える時間を持つことができた。大勢の命をうばってしまう戦争をもう二度と起さなしたためには、武器を使わずに話し合いをすることが大切だと思う。だからぼくは、例えばクラスで意見がまとまらぬときや、友達とけんかしたうにな、たときに力を解決するのはなく話し合いで解決したい。一人一人の行動が、平和につながることを信じている。

「平和大使として学んだこと」

平和のために私ができること



東深井 小学校 5年 氏名 伊藤 芽生

今、平和な世の中に生きている私が、平和のためにやれることはなんだろう。昭和20年(1945)年8月6日8時15分、広島に原爆が投下されました。火で燃えたり、ガラスのはへんがささったり、建物の下じきになつて、たくさんの方がなくなりました。たとえ生きられても、放射能のえいきょうで病気になるてしまつたり、生きているがいあく感で自分を責めてしまふ人もいました。

私は、戦争や原爆で、苦しい、悲しい思いにならない人は一人もいないと思ひました。資料館には、なくなつてしまつた人の写真使つていた物、戦争中の絵などがありました。どれも苦しそうで、ボロボロで、残こくでした。一つ一つの写真のとなりには、やさしい心のもちぬしてました。やっじまんのお姉でした。など、心にささる一言が書いてありました。全然知らない人たちなのに、自分の友達や家族のように思えて、悲しい、かわいそう

と思うよりも、助けたい、何かしてあげたいと強く思ひました。被爆者のお話では、「水」と聞くと、あの時水をあげていたら助かっていたかもしれなると、自分を責めてしまふと言つていたのがとても印象に残つています。私は今も戦争のこを思い出し、苦しい思いをしてしまふ人がいることを知りました。

私はこれから平和大使として、資料館で見たり物や被爆者のお話で聞いたことを忘れずに戦争のこわさや原爆のおそろしさを、一人でも多くの人に伝えていきたいと思ひます。まずは家族や友達に。自分が大人になったら、未来の子供達にも伝えたいです。そして、同じようなことがせつたいにおこらないで、未来もずっと平和が続くようにしていきたいです。それが、戦争や原爆でなくなつた人たちを助けられない私が平和のためにやれることだと思ひます。

「平和大使として学んだこと」

今を生きる僕が未来へ伝えていきたいこと



小山 小学校 5年 氏名 伊藤 怜音

僕達が広島駅に着いた時、とてもきれいな
街並みに、七十八年前、ここが一面焼きつく
さ木たのだとは想像もつかなかった。そもそ
も広島に対して興味を持ったのは、四年生の
夏に原爆の本やテレビドラマを見て、読書感
想文を書いたのがきっかけだった。実際に
間近で原爆ドームを見たり、悲しさを出来事
を聞くと、僕の一年前の想像とは全くちがう
衝撃を受けた。

平和記念資料館の中はとても暗く、魂の
叫びという所では、こげこげと懐かかった三輪
車や、中学生の遺品などを見て、改めて核の
恐ろしさを知り、体中が震えた。

被爆体験者のパークさんは、十三歳の時に路
面電車の中で被爆。木、周りにいた焼けこげ
た人達が「水、水をくれ」と叫び、まげよう
とする。他の大人に「やけどをした人に水
をあげるな」と言われ、とても残こくを気持
ちになつたそう。命が助かったも、心にも
傷を負った。パークさんの話を聞いた時、僕は

おねがドキドキして、心が苦しくなつた。
その後、「原爆の子の像」に行き、千羽鶴
を納めたが、鶴を折りながら治ると信じて、
一生けん命生きようとした佐々木禎子さんは
僕と同年代で七くをった事を思うととても悔
しかつたと思う。

八月六日の朝、「黙とう」という大きな合
図で鐘の音が七回、会場内に広がる中で、僕
は何の罪もない人々のかけがえのない命を一
瞬にしてうばつた原爆という悲しい出来事を
二度と起こしてほしくないと一分間願つた。

平和大使を終えた今、十歳の僕に出来る事
は、周りにいる人達へ戦争の恐ろしさを伝え
関心を持ってもらう事だ。僕も十年後に二十
歳になり、二十年後には三十歳となる。原爆
投下から百年をむかえる時には大人として、
今以上に命の尊さを伝えられたい人だ。いた
いし、石碑に刻まれている「過ちは繰り返し
ませぬから」を忘れず、核がこの世界から消
えてなくなつてほしいと願ひ続けたい。

「平和大使として学んだこと」

伝えていくこと



流山市立鰐淵小学校 6年 氏名 稲垣 絃

昭和五年八月五日、私は悲惨な過去を見た。目の前には皮膚がただれ大火傷をおった人の写真。地獄と化した広島絵。一九四五年、（昭和二十年）八月六日午前八時十五分原爆が投下された。

少し遠くの爆音が聞こえ、ピカッと光り、大きな音が聞こえた。つぼんでいた目を開けると辺りは暗く、しばらくして辺りを見わたすと街はおかしな様子になっていた。まるで海の上うな火災、がれきだらけの街、そして黒い雨亡くなった人々。被爆者の方のお話は耳を疑うような事ばかりだった。広島に来るまでは、どこか遠い国の話のようにテレビで見ている。でも現実のことなんだ。

平和大使として今回参加した理由は母だ。母が私位のところ、祖父がシベリアに帰りよとしてよく留まっていた時の話を聞かされていたと教えてくれた。「戦争で幸せになんた入なんていないんだよ」と祖父から戦争の話を聞いた。母は、様々な資料館に行き、たまたま

そして私にも、見てきたら深く考えさせられるよ」とすすめてきたので関心がありました。

実際、たくさんさんの命、未来がうはわれてしまったというし、うげきに言葉が失われてしまった二日間。同時にこんな悲しい事がおきたりいけないとずっと感じながら過ごした。私は今回の経験を過して、身近な人達に見たことと感じたことを話していこうと思う。

祖父から母へ、母から私へ伝わったように、お入でも多くの入に、学んできた事を知って。おらい、戦争のない平和な未来を願うのが私の使命だと思ってる。

「平和大使として学んだこと」

平和大使として広島へ行き思ったこと



長崎小学校 6年 氏名奥野夏穂

学校に行けて友達と授業を受けること、朝
昼夜と家族や友達とみんなでご飯が食べられ
ること、ピアノで好きな曲をたくさん弾ける
こと。これは私が「あたりまえ」と思ってい
ることだ。だが、これが「あたりまえ」では
なかった時代があった。そんな時代の中でさ
らに原爆が落とされ、全てがなくなっただけ
に、八年前の八月六日について、平和大使に任命
されたことで詳しく知ることかでき、もつと
知ろうと思えた。

私が強く心に残ったのは、被爆体験伝承者
の方の話だ。

その中でも、水を求めていた人たちのエピ
ソードは特に悲惨だった。水をあげると死ん
でしまうので、水をあげられなかったらしい。
私もその場にいたら、きっと水をあげなかつ
たと思う。水をあげた自分のせいで死なせて
しまうのはいやだからだ。しかし、「水をあ
げればよかった」と七十八年経った今も伝承
者の方は後悔していた。

伝承者の方の家族は全員生き残ったそうだ。
だが、周囲の人たちから「お前のところは何
人生き残った？」と聞かれて答えづらかったと
言っていた。家族が全員生き残っていること
は本当ならうれしいことだけれども、原爆投
下後は家族が欠けているのが「あたりまえ」
になっていった。

原爆とは、一度投下するとたくさんの人の
命と未来をうばう。生き残った人達は心の傷
と後遺症に長い時間苦しんでいる。原爆はお
そろしい物だ。

平和とは人々が笑顔で暮らし、戦争や、紛
争におびえない私が思っている「あたりまえ」
の毎日を過ごしていくことだと思う。

平和大使として学んだことを一人でも多く
の人に話をして戦争や原爆の悲惨さを伝えて
いきたい。

「平和大使として学んだこと」

広島へ行き、学んだこと



流山小学校 6年 氏名片倉 俊輔

私にとって、住む場所がある。食べることができる。着る服がある。それが当たり前のことだと思っていた。しかし、それは原爆後では当たり前ではなかった。

平和記念資料館には、ボロボロになった制服や真っ黒になったお米などがあった。他にも家族を亡くし、独りになった子供の写真もあつた。私はこのような物を見て、今ままで一度も感じたことのない衝撃を受けた。

被爆体験伝承者の話では、原爆が「ピカッ」と光って「ドン」という音がしたから「ピカドン」と呼ばれたことや、怪我がやけどを負っていない人が放射能によって死んだことなどをくわしく説明してくれた。その中で、私が印象に残っていることは、

「死にたいという人はいない。」

ということだ。なぜなら、私だったら肉が腐り、皮ふが垂れ下がるような状況だったら「死にたい」と言い、生きることを諦めてしまおうだろう。しかし、広島の人たちは生きるこ

とを決して諦めなかった。私はとても感動した。

この先二度とこのようなことを起こさないためには、まず、核保有国の国民にぜひ、平和記念資料館に来てもらい、広島、長崎の原爆の悲惨さを実際に自分の目で見て、肌で感じたことを心に焼きつけてもらいたい。それが「平和」を実現させるための第一歩だと私は考える。そして、そこで感じたことを周りの人たちにも語り伝えてもらいたい。

このようなことは、きっと、戦争をなくし、「平和」を維持することにつながると私は思う。

私にとっての本当の強さとは、武力で人をおどし、核を手放した国を攻めるということではなく、「平和」の実現へ向けて、自分なりに努力すること、全ての人を自分と同じ人間だと認めることだと考える。

私は、広島へ行き原爆の恐しさや、絶対に戦争をしてはいけないということを改めて感

「平和大使として学んだこと」



小学校 年 氏名

じた。今後も広島で学んだことを、周りの人
に伝え続けていきたい。

「平和大使として学んだこと」

平和を守るためには



西初石 小学校 5年 氏名 柏原 聡太

流山に帰って私が考えたのは、武力を使うと、平和でなくなるということでした。たとえばそれが正義だと思って戦争をしても必ず犠牲は出ます。その戦争をどうやって防げばいいのかわいて考え始めました。

戦争がおそそうな時に外交で戦争を防ぐ力が必要と平和資料館を見て感じました。なぜなら、水を求めて苦しうに亡くなつていく人の絵や写真を見て戦争を防いでくれは広島に原爆が投下されることもなかったと思つたからです。

私は被爆した時の話を聞いて悲さんだと思ひ被爆する前の話を聞いてさらにおそろましました。なぜなら、はい品として古い銅などの金属製品の回収に協力してこの国のためになりたいと考えを子供がいたことです。はい品回収に参加しないと非国民とよばれるなど今では考えられないことがおきていたことにおそろましました。

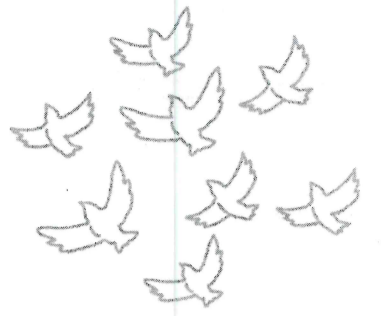
私が原爆について一番おそろいと思つたのは

後遺症です。原爆が投下され直後、放射線をあびて後遺症になつてしまつたことです。生きのびたとしても戦後すぐになつてしまふ。自分がいつ後遺症でなくなるかという恐怖は大変なものだと思います。生きのびた人たちがずっと苦しめるというのが原爆のこおろさだと思います。

私たちが平和のためにするべきことは友人のみならぶ多くの人たちに原爆のおそろさを伝えることです。平和を守るには武力にたよることなくおたがいの国が話し合うことが大切なのだと思います。

「平和大使として学んだこと」

平和



流山市立鯉崎小学校 5年 氏名 勝田結子

市役所で千羽鶴を受け取った私は、背
 筋がシャンとなった。友人の誘いで応募した
 平和大使。私だけ当選したため、最初は戸惑
 った。でも、私なりにこの1か月、戦争のこ
 と、原爆のことを勉強してきた。「いよいよ
 広島だ」と思うと胸が高鳴った。
 8/6、広島に到着した私たち29人の平和大使
 35度を超える猛暑、78年前もこんな暑さだっ
 たのかなあと思いがめぐった。最初に被爆体
 験者の話を聞き、78年前の世界に一気に引き
 込まれた。「原爆投下後、家を目指し歩く人
 々が次々に倒れ死んでいった話」「火傷跡に
 より、その後差別をうけた話」「胸が張り裂け
 そうになった。その後、資料館で見た原爆で
 ホロボロになつた街なみ。同時に緑一杯によ
 みがえつた平和記念公園も見ていたため、被
 爆体験者の話が無ければ、実際の出来事には
 思えなかつたかもしれぬ。
 8/6、祈念式典で、特に印象に残つたのは、
 広島市長の平和宣言だ。「核よくしでなく、

核はいせつ、総理大臣の前で、国を批判する
 ような宣言だった。被爆地広島だからこその発
 信できる、重い言葉であると感じた。
 当たり前前だった平和が、近年、ゆらいでい
 るように感じる。テレビで、ロシアとウクラ
 イナ、北朝鮮のミサイルなどのニュースを目
 にする機会が増えたからだ。平和を真剣に考
 え、守つていく行動を起こすことが必要にな
 ってきたのではないかと。
 今後私は、中学、高校と進学して沢山の人
 に出会うだろう。周りにどれだけ平和を広め
 られるだろうか。少し、プレッシャーを感じ
 る。恐らく私一人ではできる事はとても細かな
 事だろう。それでも、小学5年・夏、広島で
 の体験は今後の人生の財産になったに違いな
 い。8/6、広島から帰宅後、お好み焼きの話や
 もみじまんじゅうのお土産で家族が笑顔にな
 った。この笑顔が平和の第一歩だと思う。気
 負わず、家庭や学校にある、目の前の平和を
 大切にすることを始めていこう。

「平和大使として学んだこと」

悲しみのうえの平和



西深井 小学校 6年 氏名 久保 安恵花

も核に関する様々な情報にアンテナを立てて
関心を持ち続けたい。そして平和は悲しみの
上にあるということをおぼえてはいけな